



姫路—高松—徳島紙芝居調査報告

森山 優

(非文字資料研究センター客員研究員)

大串 潤児

(非文字資料研究センター客員研究員)

戦時下日本の大衆メディア研究班では、2019年2月15日から17日にかけて、兵庫県姫路市、香川県高松市、徳島県徳島市において、紙芝居の調査を実施した。

今回の調査によって134点の紙芝居を確認し(うち20点は今まで存在が知られていなかったもの、6点が存在は把握していたが現物が確認できなかったもの)、かつ地域における上演形態の手がかりを得たことは、大きな成果と言えよう。以下、調査対象と史料群について、概観したい。

1. 兵庫県立歴史博物館での調査

同館の紙芝居は、「入江コレクション」、「長久昌嗣氏寄贈紙芝居」の二群によって構成されている。前者は、児童文化研究資料のコレクターであった故入江正彦氏による蒐集物の一部で、後者は長久敏郎氏(長久昌嗣氏の父で国民学校・小学校の教員。現姫路市網干区^{かいち}の垣内地区出身)が実際に使用していたものである。順を追って紹介していこう。

「入江コレクション」は江戸時代以前から最近までを対象とした総数10万点にも及ぶ国内屈指のコレクションである。うち紙芝居は150点弱で、今回調査したものはその中の65点(平絵のもの58点、木や紙製の舞台装置や箱が付属しているもの7点)、うち撮影したものは表1の36点(同一のもの2点を含む)である。学芸課長の香川雅信氏によれば、入江氏は主として業者から入

表1 入江コレクション

作品名	発行者	発行年月
ドングリ、兵衛	画劇刊行社	1936年12月
骨なし蛸ちゃん	エバナシ・トーキー社	1937年2月カ
ヤサシイヲヂチャン	エバナシ・トーキー社	1937年3月
安兵衛と高田馬場	エバナシ・トーキー社	1937年9月
支那事変 海軍爆撃隊 荒鷲	画劇刊行社	1937年11月
金太郎	画劇刊行社	1939年10月
カミサマトシロウサギ	日本教育紙芝居協会	1940年12月
鉄の腕	日本教育紙芝居協会	1940年12月
大政翼賛 隣組	日本教育紙芝居協会	1941年1月
草鞋長者	日本教育画劇株式会社	1941年3月
聖戦(再興)交響楽	金井信生堂	1941年4月
カミサマトシロウサギ	日本教育画劇株式会社	1941年7月
オトギ列車	日本教育画劇株式会社	1941年9月
オトギカミシバイ ハナサカチヂイサン	玉山茂三郎	1941年10月
科学する熊さん	日本通運株式会社	1941年10月
〔銃後〕貯金だより	日本教育画劇株式会社	1941年10月

伝書鳩少年団	大政翼賛会宣伝部	1941年12月
鉄の進軍	東宝社	1941年12月
ヤサシイヲヂチャン	大東亜文化画劇社	1942年3月
一銭の力	日本図書出版社	1942年5月
カチカチ山	大日本画劇株式会社	1942年12月
フクチャンと怪人物	画劇報国社	1943年6月カ
戦ふ船員	日本教育画劇株式会社	1943年7月
ひばり	日本教育画劇株式会社	1943年8月
英霊に遊ぶ	大日本画劇株式会社	1943年9月
ガンバレコスズメ 決戦体制版	全甲社	1943年9月カ
ハッパの仏さん	大谷出版協会	1943年12月
金太郎の落下傘部隊 〔不揃い〕	全甲社紙芝居刊行会カ	1944年2月カ
制海の烽火	東亜国策画劇株式会社	1944年4月
モモタラウ	全甲社	1944年6月カ
南から来た少年	大東亜文化画劇社	1944年10月
一寸法師 オトギ紙芝居	不明	不明
お伽紙芝居 サルカニ合戦	不明	不明
山田長政 後編	不明	不明
平和爆弾 ことり座 KAMISIBAI	不明	不明〔戦後〕

初出	他館なし
----	------

手したらしいが、紙芝居やその袋に残された所蔵印から、それ以前の所有者が判明するものもいくつかあった。最も多かったのは滋賀県長浜市祇園町の善照寺で(6点)、肉筆の紙芝居も2点(うち1点は35枚の長編)含まれ、別の仏教系着色紙芝居が戦後に祇園日曜学校で彩色されていた。このことから、善照寺は戦前・戦後を通して紙芝居活動に積極的だったことが想像される。他にも同県神崎郡、京都市上京区、福岡市と、かなり広い地域から蒐集されている。このコレクションでしか見ることができない紙芝居は20点、うち18点が存在を把握していなかったもので、貴重な史料群である。なかでも、一般的なB4に近い判型が主流となる前の小ぶりの紙芝居(ほとんどが箱や舞台に趣向をこらしたものは保存状態が良いものも多く(写真1)、博物館ならではの収蔵品である。

さらに興味深いのは、戦後の改変状況がつぶさにわかる「墨塗り」紙芝居の存在である。例えば1941年に出版された『聖戦交響楽』は「聖戦」を「再興」と書き換え『再興交響楽』として使用されたようである(写真2)。残念ながら、この紙芝居を所蔵しているのはこのみなので、どのような台詞が削除されたかを全て確定するのは困難だが、台詞の多くが完全には塗りつぶ



写真1 『お伽紙芝居 サルカニ合戦』 入江コレクション136-104-10
兵庫県立歴史博物館蔵



写真2 『聖戦交響楽』 入江コレクション15-173-1-6
兵庫県立歴史博物館蔵

されていないため、かなりの部分が復元可能である（「靖国神社」→「再建の御社」など）。また、館の目録に『貯金だより』として登録されている紙芝居は、もともと『銃後貯金だより』だったが、戦後に使用するため「銃後」の字に紙を貼って隠蔽し、台詞も大幅に改変されている。さらに、これらの紙芝居が改変してまで戦後に上演されたことにも注目したい。前者は失明した傷痍軍人に対する認識を深めさせる、いわば啓蒙的な側面が戦後も必要と考えられたためであろう。後者は、敗戦後のハイパーインフレを食い止めるため、政府が町内会・隣組への割当や標語の募集など硬軟さまざまな手段を使って国民に貯蓄を訴えた流れのなかにある。戦前の紙芝居を再び引っ張り出して戦時期さながらに「新日本建設」のための「貯金報国」（新たに書き加えられた手書きの台詞）を訴える紙芝居を、国民はどんな目で観たのだろうか。しかも、これは善照寺という戦前・戦後を通して紙芝居活動を続けていた場で使用されたと推測され、紙芝居の上演者・場という問題を考える材料の一つとなろう。

それから、国民的キャラクターだったフクチャンが主人公である『フクチャンと怪人物』は、二部所蔵されているものの、第一景と二十（最終）景が欠落している。幸い、後述のように今回の徳島調査で欠部分は判明したが、これも戦後の「付度」の結果、意図的に廃棄されたものと推測される。

長久昌嗣氏寄贈紙芝居は総数30点（これに古写真・切り抜きが加わる）、うち2点が児童が製作した手描きのもので、残る28点は全て戦前の印刷紙芝居である。そのなかで幼児向けのは3点、それ以外は僅かな偉人もの・歴史ものを除くと全て戦意昂揚のための国策紙芝居である。このなかから貴重な紙芝居10点を撮影した（表2。手描き2点を含む）。他の機関に所蔵されていないものは『村の進軍』『銃後の誓』の2点、台詞が

表2 長久昌嗣氏寄贈紙芝居

作品名	発行者	発行年月
新興タイ国	日本教育画劇株式会社	1941年6月
村の進軍	日本教育画劇株式会社	1943年10月
銃後の誓	日本教育画劇株式会社	1943年12月
大空につづけ	東亜国策画劇株式会社	1944年7月
花咲翁	東亜国策画劇株式会社	1944年7月
勝利への道	翼賛文化画劇協会	1944年8月
自分は海員	日本教育画劇株式会社	1944年9月
オトヨイワウジサマ	東亜国策画劇株式会社	1944年10月
モモタラウ	長久敏郎指導、 初四仁組児童	1941～1945年カ
太閤さん 豊臣秀吉	自作	戦時期

他館なし	手描き
------	-----

変更されているもの1点（『新興タイ国』、出版されたのは日米開戦前だが、開戦後に上演できるよう状況説明を修正した印刷紙が貼り付けてある）は、この館のみの収蔵品である。他は非文字資料研究センターが所蔵していないものに絞った。

これらは、長久敏郎氏が国民学校で使用するために蒐集したという性格から、史料群としての意味を考えると、たいへん貴重である。国策紙芝居がほとんどを占めているという点は考察の必要があろう。また、長久敏郎氏が指導した児童自作の紙芝居も、活動の一端を窺わせる史料として、重要である。さらに自作の紙芝居『モモタラウ』は、『国語教材ヨミカタ』を底本としているが、これまで未発見だった紙芝居『時局と選挙』（日本教育紙芝居協会、1939）を台詞に使用している。画の上に貼られている薄紙（その上に台詞を記入）から透けて、画の概要を類推することができる（絵が描かれている台詞面は透かして見ることはできないが、国会図書館に同名の概説書が収蔵されているので、復元できるかもしれない）（写真3）。



写真3 兵庫県立歴史博物館における調査



末尾になるが、一日半にわたる調査におつきあいいただいた学芸課長の香川雅信氏に、改めて感謝の意を記したい。

2. 「押印」を読みとく—高松市平和記念館調査

2月16日、高松駅には昼ごろ着いた。予定していた調査先の都合が悪くなって半日の時間が出来てしまっていた。姫路組は素晴らしい「成果」を挙げていて、撮影時間が長引き、四国での合流も夕刻になるという。同行の松本さんと相談し、「高松市平和記念館」を訪ねることとした。私たちの急の訪問にも担当者はていねいに応えてくれた。ここで閲覧できた紙芝居は5点（目録で確認できた戦時紙芝居のすべて）、初出本・版違い異本はなかった。しかし多くの紙芝居の箱や奥付に所蔵印が捺印されていた。それは「大政翼賛会香川県支部 翼賛紙芝居部 東讃支部」「大政翼賛会香川県支部事務局」の2種であり、なかには両方の印が押されているものもあった。詳細は不明だが「No.160」と捺印されたものもある。所蔵紙芝居本数を示すものだろうか。

担当者に受け入れの経緯を調べてもらった。これらの紙芝居は、1996年、高松市東部の寺院・西光寺の修理にあたって本堂裏から出てきたもので、平和記念館所蔵となったものである。西光寺には現在でも保育園があり、戦前から保育事業に携わっていた。西光寺の三浦数男氏は翼賛壮年団地区団長も務め、「その活動の一つとして子どもたちに日曜学校まで開いて、これらの紙芝居を見せていました」という⁽¹⁾。「東讃」とは現在の東かがわ市・さぬき市の地域呼称だが、西光寺のある高松市前田も市の東端、東かがわ市と接する地域にある。

大政翼賛会香川県支部には「翼賛紙芝居部」があり、それは各地域に「支部」を持っていた。実際の実践活動は不明だが、少なくとも実演者は保育事業を行なっている寺院関係者であり、かつ翼賛壮年団幹部であったことがわかる。

香川県の翼賛運動全体の姿はわずかの調査ではもとよりわからないが、いくつかの論点が設定できよう。第1に、より具体的に翼賛会の末端機構を調査・検討してみることである。例えば、大内町水主（現、東かがわ市）の「大山家文書」にある「大政翼賛会」「譽水村常会」関係資料なども調査に値する史料群だろう⁽²⁾。第2に、日本農民組合の「組織率において傑出し、その発展が日農と強く結びつき、日農傘下で全国一の組合員数を擁するに至っていた」⁽³⁾香川県の強固な農民運動、特にその指導者たちの戦時下における活動との関係である。1928（昭和3）年、第1回普通選挙で労農党大山郁夫（次点）の政治的基盤となるほどの力量をそなえていた日農香川県連合会のリーダーたちが⁽⁴⁾、普選直後の弾圧（3.15事件）で壊滅的打撃を受けたとはいえ、どのように戦時下を過ごしていたのか、翼賛会の活動との関わりで考え

てみる必要がある⁽⁵⁾。当然のことながら、そこでは日農香川県連木田郡支部書記であった朝倉菊雄＝島木健作の戦時民衆論の経験史的基礎といった問題も視野に入るだろう。第3に、高松のモダニズムと周辺農村における文化的実践の関係という問題である。前掲『香川県の百年』250頁掲載の高松市街丸亀町商店街の写真（1941年）は、戦時中とはいえある種の「にぎわい」がうかがわれるものとなっている。丸亀町には1931年に開店した「三越高松店」があり（県内初の6階建て高層ビルであったという）、1934（昭和9）年には「瀬戸内国立公園」が指定されている。特に電鉄による交通網の整備と人びとの移動、その結果として地域に展開して行く映画文化の詳細は、紙芝居文化実践を基礎の部分で考える重要なテーマとして共同研究でも重視されている⁽⁶⁾。第4に、軍都・善通寺と紙芝居の文化という問題である。すでに紹介したことだが、善通寺師団では報道部に「映画班」と「紙芝居班」を置き、管内に軍事思想普及の活動を行なっているし、また兵士のあいだで好評の紙芝居を調査している。軍によれば、映画は1日平均200～300人動員に対して紙芝居は1日1,000人以上とあるが、これも先述した地域におけるモダニズム文化（映画）と紙芝居文化の相互関連という問題になろう⁽⁷⁾。

高松の市街地をブラついて地域の「繁華街」を体感していたころ、姫路組が高松に到着、宿をもとめた屋島に荷をほどいてから市街にくりだし、瀬戸内の美味な魚をあてに、調査「成果」や研究課題について話はつきなかった。

3. 実演者の姿を求めて—徳島県立文書館調査

2月でも瀬戸内の気候は暖かい。鳴門海峡の陽光がまぶしく感じられる街道を阿波・徳島にむけクルマを走らせた。午前中には徳島市街「文化の森総合公園」内にある徳島県立文書館に到着、早速、担当者の金原祐樹さんと打合せを行った。

中心的に調査した史料群は「西崎家文書」と「島正家文書」の2つ。西崎家は徳島市の南・阿南市にある。寄贈者の父親は表具師で和紙なども扱う職業であったが、コレクターでもあり、紙芝居も父親が収集したものである。ここでは7点の紙芝居を閲覧、1点「奥付」が欠けているものがあって課題が残るが⁽⁸⁾、戦後のもの初出2点を確認した。

「島正家文書」には28点の紙芝居が含まれていた。初出のものは2点（1点は奥付を欠くが内容から戦後のものと判断）、版違い異本3点が確認された。初出のものは、田中聴雨（作）・油野誠一（絵）『濁流に歌う』（日本教育紙芝居協会1942年、22枚、請求記号シマ300005）。（写真4）

なお兵庫県立歴史博物館に所蔵されているながら表紙欠であった『フクちゃん和怪物』（シマ300023）の撮

影も行った。紙芝居のケースには「大政翼賛会徳島支部」「大政翼賛会海部郡支部」の印があるものがあつた。

金原さんから「島正家文書」受け入れの経緯の説明を受けた。徳島県立文書館企画展示「民衆が見た戦争」に際して⁹⁾、島家のご家族が展示されていた紙芝居を見



写真4 「濁流に歌う」徳島県立文書館蔵

て、同家所蔵のものを持参、寄贈したものであるという。島正家は徳島市内にあり、紙芝居舞台（木枠）も展示会にあわせて貸与されたが（現在は返却）、その枠には「大政翼賛会徳島市内町班」の書き込みがあつた。島正家は紙芝居を実演する団体の事務所になっていたようで、まとまった数の紙芝居も保存されていたとのことであるが、詳細な事情はご遺族には不明とのこと。時間の関係上、確認はできなかつたが、目録上の『爪文字』（請求記号シマ 300027）の備考欄には、「文化奉公会の解説あり 大政翼賛会徳島支部の印あり」とあつて、町内会幹部が「文化奉公会」を名乗り、「大政翼賛会」支部のものを使ってするという紙芝居実演・関係団体の存在をうかがわせる。

今回の高松・徳島で閲覧することが出来た紙芝居数は40点、成果としては40点のうち初出2点（戦時1・戦後1）、版違い異本3点が確認されたこととなる。なお、紙芝居それ自体とは別に、箱や紙裏面に捺印された印などから紙芝居実践の団体・関係者のすがたが見えて来たことも今回調査の特徴だろう。

「高見家文書」には紙芝居そのものは含まれなかつたが、関連史料が何点か確認できた。高見家は麻植郡山川町川田（現・吉野川市）にあり、近世以来、藍商を家業とし、吉野川中流域の産業振興に尽力した地域名望家で、歴代の当主は、各種産業団体のリーダーになるとともに町村会議員や郵便局長などを出している。戦時期の当主は高見文二郎（1891～1962）であり、彼は大政翼賛会徳島県協力会議議員、また父親同様、郵便局長を勤めていた¹⁰⁾。「高見家文書」には、「婦人指導者錬成」の意義を論じた史料や（『第六回 徳島県協力会議議案』大政翼賛会徳島県支部 1943年7月5～6日、高見家文書6-2-④）、生活改善・「享楽の節制」という翼賛会の方針

に対して、「映畫を単なる享樂の対象といつて抑圧することはどうかと存じます」という高見文二郎の指摘など興味深い議論を含む史料（『秘 昭和十八年七月 第六回徳島県協力会議議案』大政翼賛会徳島県支部 1943年7月、高見家文書6-2-⑩）があつた。高見の指摘に対して、提案者は、映画などの「享樂の節制」は「官公吏・教育者」という「指導階級の人々は映畫をみなくとも時局は十分認識できるはずであるしまた認識しなければなりません。かやうな人々は映畫をみる時間があればそれを自分の仕事のうへに有効に利用していただきたい」と応答しており、指導者階級の「国策理解」一節制と民衆の「国策無理解」・啓蒙の対象一節制不要論という戦時文化論の一断面がうかがえて興味深い（協力会議での加賀見忠平の発言、75頁）。

「紙芝居実演技術講習会受講者名簿」（1枚 年不詳 タカミ 02220000）には吉野川流域の各地域郵便局吏員（集配員・事務員・通信手）18人が記載されている。裏面には手書きメモにて「一般ニ地ノ文ノ朗読ニ工夫無シ感情ヲコメテヤレ 台詞無性格 誤読ガ非常ニ多イ」とある（写真5）。「感情」や「工夫」無し、かつ「誤読」が多いというその実態からは、逆にどのような紙芝居実践者が「理想型」とされていたのか、がうかがえるだろう。なお資料閲覧、徳島県域の歴史、高見家などについては谷恵子さんのご教示を受けた。

今回の四国調査は紙芝居関係地域社会史への展望を得るいくつかの史料を調査することが出来たことが特徴であつた。寺院・保育関係者で翼賛壮年団長のもとに所蔵されていたもの（高松市・西光寺）、町内会業務の関係で多くの紙芝居が残存した事例（徳島・「島正家文書」）があり、所蔵印などからは大政翼賛会県支部や「翼賛紙芝居部」などの名称が確認された（「大政翼賛会香川県支部」「同事務局」「同翼賛紙芝居部」「同東讃支部」「大政翼賛会徳島支部」「大政翼賛会徳島市内町班」（島正家））。高見家文書からは地域の郵便局員

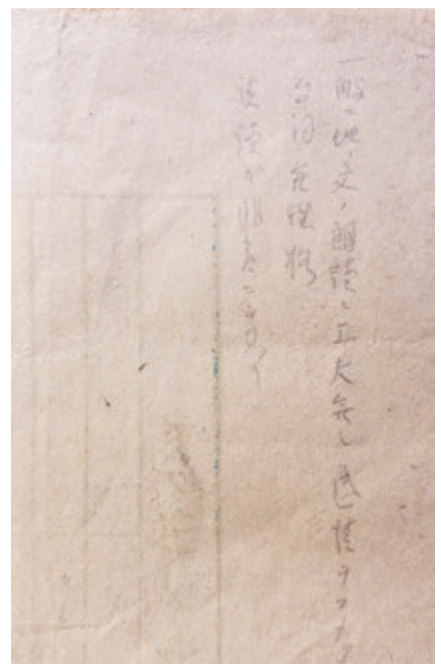


写真5 紙芝居実演技術講習会受講者名簿 徳島県立文書館蔵



(集配人・事務員・通信手)を講習対象としていたことが分かり、かつ実践者がどのような問題点を抱え、逆どのような実践が理想とされているのかを考えるきっかけを得ることが出来た。

おわりに

それぞれの帰宅時間が迫っていた。それでも一と思いついて阿波・徳島の近現代史関係の史跡を訪ねた。特に賀川豊彦記念館では充実した展示と解説で多くのことを学ぶことが出来た。キリスト教関連、そして戦時期の活動など、賀川と紙芝居とつなぐ糸はいくつもあるが、まだその具体像は判然としない。紙芝居の所蔵を問い合わせるも、不明とのことであった。戦時の文化指導者と紙芝居との関係は、まだまだ四国の早春のようにぼんやりかすんで見えている。

※本稿は、冒頭～1項：森山優、2項～おわりに：大串潤児の分担執筆である。

【注】

- (1) 高松市平和を願う市民団体協議会編『今に伝える平和と生命の尊さ—高松市民による戦争体験記 第2集 高松市平和ガイドブック』同・高松市市民文化センター平和記念室 2008年。

- (2) 瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵。同編『讃岐国大内郡水主村大山家文書目録』同 1983年。
 (3) 伊丹正博・徳山久夫・細川滋『香川県の百年』山川出版社 2003年、192頁。
 (4) 大山郁夫と日農香川県連合会の関係など、民衆に近い距離で行われる政治実践において、民衆を組織化するうえでどのように紙芝居などの文化実践が意味を持ったのか、という問題については、単に戦時期のみならず、1920年代以降の大衆政治家の文化的下部組織という論点があると思う。本研究グループの共同調査では2016年実施の兵庫県但馬地域豊岡・出石町の紙芝居実践と齋藤隆夫の基盤という論点である。
 (5) とりあえず山本繁『香川の農民運動—大正デモクラシーと三一五』平和書房 1970年、横関至『近代農民運動と政党政治—農民運動先進地香川県の分析』御茶の水書房 1999年、同『農民運動指導者の戦中・戦後—杉山元治郎・平野力三と労農派』御茶の水書房 2011年。
 (6) 香川県小豆島安田村の戦時翼賛文化運動において実践されたスペクタクル性をもった演劇運動については拙著『銃後』の民衆経験—地域における翼賛運動』岩波書店 2016年を参照してほしい。
 (7) 拙稿「戦時紙芝居論—紙芝居は誰が演じたのか？」安田常雄編『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版 2016年。なお、香川県における地域と軍隊については、坂根嘉弘編『地域のなかの軍隊 5 西の軍隊と軍港都市—中国・四国』吉川弘文館 2014年、また四国地域史研究連絡協議会編『戦争と地域社会—慰霊・空襲・銃後』岩田書院 2011年も参照。
 (8) 『母のおもかげ』日本教育紙芝居協会、内容からは戦前か、目録では1946年となっている。
 (9) 『終戦70周年記念 民衆が見た戦争』徳島県立文書館企画展図録 2015年8月5日～10月25日。
 (10) 『高見家文書に見る吉野川中流域の産業』徳島県立文書館 2018年1月。

戦時下日本の大衆メディア研究班

2018年度第2回研究会

開催趣旨：本研究班では、成果報告書『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版）の刊行を機に、2018年10月より神奈川大学エクステンション講座（全6回）を企画していましたが、受講希望者定員未達（非開講）の代替として、企画の一部を研究会として公開しました。参加者は約50名、日・台両語による実演は貴重な機会でもあり好評でした。新垣・原田による報告内容は、今後の成果報告書にてあらためてまとめられる予定です。

日時：2018年11月10日（土）14：00-17：30

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館406室

プログラム：

○報告1. 新垣夢乃（非文字資料研究センター研究協力者）「植民地台湾で紙芝居はどう演じられ、どう見られていたのか」

○実演 紙芝居『みのる秋』『好年冬』—日本語・台湾語による上演— 劉雅婷（呉鳳科技大學 応用日語系4年生）、楊竣強（呉鳳科技大學 応用日語系3年生）

○報告2. 原田広（非文字資料研究センター研究協力者）「戦時下紙芝居の登場人物」

紙芝居研究会シンポジウム「戦時・占領期印刷紙芝居の諸相—浦上喜平収集紙芝居の寄贈をうけて—」

開催趣旨：浦上喜平収集紙芝居（浦上史料）について（ポスターより転用）

昨年、静岡県立大学附属図書館に戦時・戦後期の紙芝居194点が寄贈されました。これは、浦上喜平氏（菊川市の篤志家。戦時・戦後の混乱期に奉仕活動に熱心に取り組んだ方）が収集したもので、当初は菊川周辺に集団疎開させられた児童た

2018年度（後半）研究会記録

ちの慰問が目的でした。紙芝居を数多く保存している機関は多々ありますが、一人の人間が実際に使用するために集めたものとしては、質・量ともに類例をみません。本シンポジウムでは、この貴重な史料群が持つ意味を、様々な角度から分析し、その位置づけを探ります。

（非文字資料研究センターからは、報告者のほかに4名が参加し、午前中に、浦上史料の閲覧をさせていただきました。）

日時：2018年12月22日（土）13:30-17:00

場所：静岡県立大学附属図書館（草薙キャンパス）3F LCフロア—

○第一部 浦上史料の紹介

北原勤（静岡県近代史研究会会員）「浦上喜平という人」
 森山優（静岡県立大学国際関係学部教授、神奈川大学非文字資料研究センター客員研究員）「浦上史料の概要」



紙芝居『日本のつばめ』上演（静岡県立大学羽衣つたえ隊）

○第二部 紙芝居研究の現状と展望

基調講演：安田常雄（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班代表、神奈川大学歴史民俗資料学研究所特任教授）『「国策紙芝居」—その視点と問題群』

研究報告：新垣夢乃（東京福祉大学講師、非文字資料研究センター研究協力者）「植民地台湾の紙芝居—故郷喪失者が描いた「ふるさと」「日本」—」